

河野裕子さんと永田和宏さんが出会ったのはふたりが京都女子大学と京都大学の2年生だった1967(昭和42)年のこと。短歌の同人誌をつくる顔合わせの会でした。

中学時代から歌をつくり、新聞雑誌に投稿していた河野さんの歌(揺すらむとして不意にまがなし少年めきて君はあまりに細き頸してゐる)のなかの「まがなし」が、「かなし」に強調の接頭辞「ま」をつけたものだ。他の学生にはわからなかった。そのとき、「なんでこんなわからへんの」と言っていた河野さんの生意気さに永田さんはひかれます。

高校のとき二年休学した河野さんは永田さんよりひとつ年上で、さらに早熟的な才能を見せる一方で体が弱く、デートの途中で気を失うような小柄で儂げな少女でした。

たとへば君 ガサツと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか

ブラウスの中まで明かるき初夏の日  
にけぶれることきわが乳房あり

22歳の若さで新人の登竜門である角川短歌賞を受賞した河野さんは、3年後に第一歌集の『森のやうに獣のやうに』を出し、みずみずしい才能が話題をさらいます。

関川さんが初めて知った河野さんの歌も「たとへば君」でした。「場面」の構成がとても演劇的で、口ずさむうちに覚えてしまう。それなのに、自己愛にとっぷり浸っていない強靱なセンスを感じました」といいます。

永田さんが大学を卒業した翌年にふたりは結婚します。その次の年には長男淳さんが、2年後に長女の紅さんが誕生しました。

しんしんとひとすぢ続く蟬のこゑ  
産みたる後の薄明に聴こゆ

身ごもったとき、「生と一緒にも死も孕んでしまった」と河野さんは感じます。新しい命の誕生に死を思うような、繊細すぎる感受性はそのま彼女を苦しめますが、「君はそのままがいい」という永田さんの一言が生涯の支えになります。

森永乳業の研究所に勤務していた永田さんは30歳を前に母校の京大に戻ります。細胞生物学者と歌人、二足のわらじをはく多忙な生活を送る永田さんを気づかないながら、河野さんは旺盛に歌をつくり続けます。

子がわれかわれが子なのかわからぬまで子を抱き湯に入り子を抱き眠る



# 河野裕子さんの 生きてきた日々、 短歌の力

2010年8月に亡くなった歌人の河野裕子さんと、夫であり歌人の永田和宏さんは、生涯にわたって千首近い歌に互いの思いを詠みました。死の前日まで歌をつくり続けた河野さんの人生は新聞やテレビでも紹介され、最後の歌集『蟬声』(青磁社刊)や、彼女を支えた家族のエッセイも広く読まれています。河野さんの歌と足跡を、短歌に造詣の深い作家の関川夏央さんと読み解きます。

取材：文||佐久間文字  
写真提供||青磁社(関川さんの撮影のみ佐久間文字)

たとへば君  
ガサツと落葉すくふやうに  
私をさらつて行つてはくれぬか



少女の頃の河野さん



結婚式に臨む永田さんと河野さん



結納で、河野さんと並び、まっすぐカメラを見る永田さん

間もなく淳さんと紅さんが生まれ



子がわれかわれが子なのかわからぬまで子を抱き湯に入り子を抱き眠る



せきかわ・なつお  
1949(昭和24)年新潟県生まれ。作家。短歌を扱った著書に『現代短歌そのころみ』(集英社文庫)、『子規、最後の八年』(講談社刊)、『解説する文字』(岩波書店刊)ほか著書多数。

子育て、家事、夫婦げんか。日常が息をするような自然なリズムで詠まれていきます。淳さん、紅さんも子どもの頃から歌をつくりはじめました。サザエさんのマンガのように一家の様子が見え抜けたため、「歌壇の磯野家」と呼ばれたこともあったと、永田さんは一家で新聞連載したエッセイをまとめた『家族の歌』でユーモラスに書いています。

1984(昭和59)年、永田さんがアメリカの国立癌研究所に招かれ一家は渡米、2年後に帰国します。その頃の歌。

「文学の世界にもフェミニズムの影響が強かった時期で、もちろん彼女もその波は知っていたでしょうし批判もされたと思いますが、真っ向から反論するのではなく、あえて肩の



力を抜いて歌をつくっていますね」  
(関川さん)

やがて子どもは成長し、大学生になった淳さんは実家と同じ京都市内に部屋を借りて住むようになり、紅さんも大学に進みます。歌人として円熟期を迎えた夫妻は順調に作品を発表、数々の賞を受けています。永田さんは短歌結社の「塔」を主宰するようになり、同じ結社に移った河野さんも選者となりました。

たつぷりと真水を抱きかかればもれる  
昏き器を近江と言へり

琵琶湖を詠んだ、初期の、代表作のひとつです。「その湖の南岸で育った彼女が、対岸生まれの歌人を伴侶に選びとったとは、やはり奇縁であろう」。かつて新聞コラムで関川さんがそう書いたとき、河野さんから「そういうわれればそうだと気づきました」と手紙をもらったそうです。

永田さんは3歳のときに母親を結核で亡くしています。つきあい始めた頃、お母さんはどういう人と聞いた河野さんに永田さんは「目が二つある」と答えた。それしか言えない彼の寂しさに大泣きしたと河野さんはエッセイに書いています。

「永田さんは科学の分野でも短歌で

対する永田さんの歌。

平然と振る舞うほかはあらざるを  
その平然をひとは悲しむ

よい精神科医とも出会い、河野さんによく安定が見えた08年、乳がんの再発と転移が見つかりました。

病むまへの身体が欲しい 雨あがり  
の土の匂ひしてゐた女のからだ

俺よりも先に死ぬなど言ひながら  
疲れて眠れり靴下はいたまま

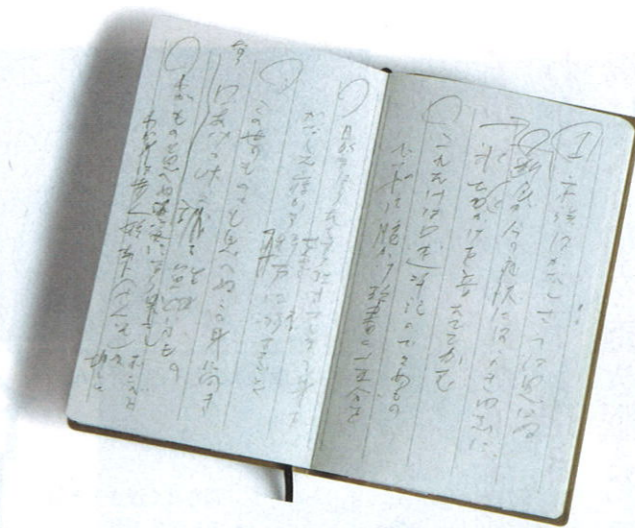
永田さんの歌にも、妻への思いが  
あふれます。

馬鹿ばなし向うの角まで続けようか  
君が笑っていたいと云うなら

一日が過ぎれば一日減つてゆく  
君との時間 もうすぐ夏至だ

出会ってから四十数年、互いをう  
たった相聞歌を数えると河野さんが  
500首、永田さんが470首あつ  
たといえます。

自宅での闘病中も、河野さんは手  
帳やティッシュの箱、葉袋にまで歌を  
書きつけていました。鉛筆を持たな



最後まで短歌をつくり続けた河野さん。亡くなる1か月前の手帳。

### 河野裕子

1946(昭和21)年、熊本県に生まれる。66年、京都女子大学入学。69年、角川短歌賞。77年、『ひるがほ』で現代歌人協会賞。81年、『桜森』で現代女流短歌賞。84年、家族で渡米。2000年、乳がんを手術。02年、『歩く』で紫式部文学賞、若山牧水賞。08年、乳がんが肝転移。宮中歌会始詠進歌選者に。09年『母系』で齋藤茂吉短歌文学賞、遼空賞。10年、乳がんにより死去、享年64。

## 病むまへの身体が欲しい 雨あがりの土の匂ひしてゐた 女のからだ



孫も生まれて、家族と一緒に



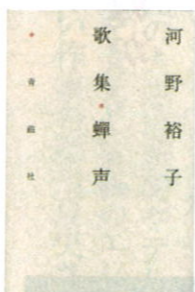
無類のネコ好きだった河野さん



歌人としていきいきと発言

手をのべてあなたとあなたに  
触れたときに息が足りない  
この世の息が

### 河野さんをもっと知るための図書ガイド



【たとへば君 四十年の恋歌】  
河野裕子・永田和宏著／文藝春秋刊／1470円  
二人が詠んだ相聞歌380首とエッセイを編んだ一冊。

【もうすぐ夏至だ】  
永田和宏著／白水社刊／1995円  
死の前日までの歌を収めた、15冊目にあたる歌集。  
タイトルは本文中にも引用した歌から。

【家族の歌  
河野裕子の死を見つめた344日】  
河野裕子、永田和宏、永田淳、永田紅、植田裕子著／産経新聞出版刊／1260円  
親子4人と、淳さんの妻が綴る歌とエッセイ。

【たったこれだけの家族】  
河野裕子著／中央公論新社刊／1470円  
アメリカ時代を描くエッセイ。

も一流の大人(たど)なだけけど、欠落した部分があると河野さんは気づいていた。彼のその「空洞」に、何につけ過剰な河野さんを受け止める余地があったんじゃないでしょうか(関川さん)

自分の仕事は永田和宏を一日でも長生きさせること、と考えていた河野さんですが、2000(平成12)年9月、左胸にしこりが見つかり、悪性の腫瘍と診断されます。

何といふ顔してわれを見るものか  
私はここよ吊り橋ぢやない

検査を終えた河野さんを迎えにきた永田さんの、痛ましい表情を見たときの歌です。

手術は成功しましたが左半身の痺れなど後遺症が残ります。眠れないので服用した睡眠薬の副作用もあってか河野さんの精神は時おり不安定になり、科学者としてつとめて冷静に事態を受け止めようとする永田さんに激しい怒りをぶつけました。刃物を机や畳につきたて、家出したこともあったといえます。

今ならばまつすぐに言ふ夫ならば  
庇つて欲しかった医学書閉ちて

くなつてからは、つぶやきを家族が書きとめて、亡くなる前のひと月ほどで200首近い歌が残されました。

八月に私は死ぬのか朝夕の  
わかちもわかぬ蟬の声降る

かつて永田さんは「死のまぎわまで歌を作り続ける、そんな存在をのみ歌人と呼びたい」と書きましたが、その言葉の通りに河野さんは生きました。最後の歌は死の前日。

手をのべてあなたとあなたに触れた  
きに息が足りないこの世の息が

「たとえば向田邦子の家族劇は本来何も無いところに波乱を描きますがお二人の場合は逆。芸術家が二人、同じ家に暮らすというのはたいへんなことで、書きようによっては戦場のような話にもなるのに、そこはかとないユーモアに満たされる。いま河野さんの歌や家族のエッセイが読まれているのは、家庭と文学との、奇跡みたいなありようへの憧れのゆえじゃないでしょうか」と関川さん。

10(平成22)年8月12日、亡くなる日、「われは忘れず」とつぶやいた後に「うん、もうこれでいい」ともらしたのが最後の言葉だったそうです。